J-cupスキーO

木村佳司

毎年品質の高いスキーO 大会を提供している J-cup。今年も熱心なスキーオリエンテーリング愛好家が山形に集まった。
（2001 年 2 月 24 日-25 日 山形県真室川町）

ヤッホー今年は大雪だぜ！

私は信州・松本に住んでいる。信州というと「雪が多い」と思われがちだが、松本あたりは意外と雪が少ない。昨年など一度も雪かきをせずに冬を過ごすことができた。しかし、今年は違う。1 月の中旬に信州は大雪に見まわれてしまった。大雪の時はご近所みんなで雪かきをするものだが、私は自宅周辺の雪かきをさっさと済まして、あとは自宅付近の道路でスケーティング滑走を楽しんだ。周囲の視線は新雪以上に白かった・・・

今年は例年になく雪上での充実したトレーニングに恵まれて、向かえた J-cup だった。

板が走ればレースも楽しい

滑走技術も体力も充分とは言えない私だが、それでも例年よりはるかに板を滑らせる技術がついたらしい。フット O では今の私の体力では絶対にかなわない相手と互角に競り合うことが出来たのだ。

体力、ナビゲーション能力の他に滑走能力、そしてマテリアルの能力、そしてワクシングなどが成績を左右するのが、このスキーオリエンテーリング。実に奥が深くて面白くしかも贅沢なスポーツなんだなと思う。

ショートディスタンス

真室川は秋山スキー場と秋山牧場を中心にクロスカントリーの常設コースがある場所で、これを基本にコースが設定される。やはりスキーオリエンテーリングを開催できる場所というのはどうしても限られてしまうのが現実である。これにスノーモービルを使用して

スノートラックを増設し、実際にコースを組んで行く。

今回のコースは会場の秋山スキー場から牧場を通り、雪原となった田んぼを横切り、森の中を抜けるというコース設定になっていた。

木村の参加した M35A では中盤で大きくルート選択を迫られる悩ましいレッグがあった。スキーO のルートチョイスはとても難しい。

巡航速度が登りと下りとでは極端に違うし、トラックの状態や雪質、ワックスの状態や選んだスキー板の種類によってさまざまなシーンによる巡航速度が極端に異なる。

単に距離だけではなく、こうした点を頭に入れて、最適なルートを選ばなくてはならない。しかもタイムロスを最小にするために、高速に滑走している状態でこれらを読み。これは至難の技である。

さて、ショートディスタンスの成績は男子の丸山哲史と酒井佳子がぶっちぎりで優勝した。丸山は日本ではぶっちぎりの速さを持つ。木村もレース中に丸山に遭遇したが、やはり速さはダントツであった。

J-CUP2001 SHORT DISTANCE

M21A

1	丸山哲史	館林 OLC	0:30:16
2	元木悟	長野県協会	0:36:41
3	高橋善徳		0:39:37

W21A

1	酒井佳子		0:36:08
2	山浦友子	長野県協会	0:46:07
3	高橋美和	水篤刈	1:02:30

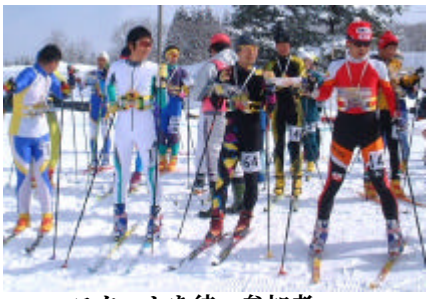
W21A 完全優勝の酒井佳子

ロングディスタンス

大会2日目はロングディスタンス競技が行われた。この日のコースで特徴的だったのは妥協のないコース距離設定である。男子 M21A クラスで 13km。女子 W21A クラスでも 11km のコース設定である。主催者の意図として国際大会に向けての充分に練習となりうるコースを用意したということである。
しかし、競技人口の少ない日本のスキーO において、多くの参加者にとってこれはなかなかきつい設定である。かくいう木村もこのロングディスタンスの距離設定を見て M21A ではなくちょっと軟弱な M35A にエントリした一人である。成績を見ていただければ判るが、男子はともかく女子においては距離の長さからかなりきついレース展開になったようである。

スタート役員たち

ロングディスタンス競技はマススタートで行われた。スタートの順序によって有利/不利がはっきりと判るスキーO において、マススタートというのは公正を保つ一つの回答だろう。
それ以上に、マススタートでは競う楽しさを味わうことができる。参加人数が少ない現状では当面はマススタートも良いのではないかな？


スタートを待つ参加者

完全優勝の丸山哲史

この日の天気は、スタートした時はピーカンの天気であったが、レース途中では天候が急変して大雪が振り出したり、10分するとまたピーカン天気になったりと、くるくると天候が変わっていった。
コースも森林地帯の細かなナビゲーションスキルを要求する部分があるかと思えば、ダイナミックにガンガンとスピードを追い込むレッグもあったし、新雪の中を直進してゆくチョイスもあったりと、バラエティに富んでいた。

こんな中、地図を読み、森を駆け抜けて行くというのはホントに総合力が必要だなと思う。自分の中ではスキーO こそ「冬のキングオブスポーツ」だという思いをより強くさせてくれた今回の J-cup のロングディスタンスだった。

願わくばもう少し参加者が増えて、より多くの競技者と競ってみたいと思う。読者の皆さん、スキーO を経験してみませんか？
フット O ではだんだんベテランの域に達している方、最初のスキーO では頭が真っ白になって、最初にオリエンテーリングを始めた時のような新鮮な感覚が味わえること請け合いです。

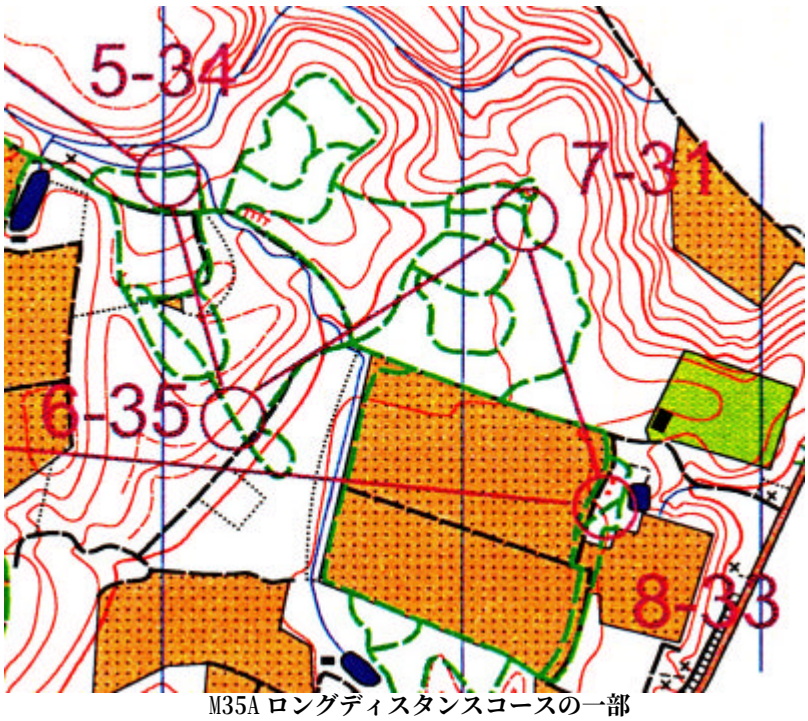
J-CUP2001 LONG DISTANCE

M21A

1	丸山哲史	館林 OLC	1:11:36
2	関清	小千谷 SC	1:19:12
3	宗形竜憲	二本松 OLC	

W21A

1	酒井佳子		1:17:26
2	山浦友子	長野県協会	1:56:38
3	白鳥桂子	水篤刈	2:05:45



M35A ロングディスタンスコースの一部
耕作地もすっぽり雪をかぶって、地図から想像する以上に白い世界がそこにはあります。森の中は神秘的ですらあります。

スキー0 J-cup 運営後記

山田敦史

J-CUP 真室川大会にご参加いただき、ありがとうございました。大会後、たくさんの方から楽しかったという言葉を聞くことができ、運営者として何よりうれしく思います。また、大会開催に向けて各方面でご尽力下さいました皆さんに感謝いたします。

ショートが終わった夜に丸山哲史さんから、ウイニングに16秒及ばなかったのが悔しい、ロングではぜひウイニングを切りたい、と言われました。実際ロングでウイニングを3分切って戻ってこられたときは、ほんの少し悔しかった反面、コース設定者としてとてもうれしく感じました。岐阜に引っ越したことで、雪の上でのトレーニングが思うように出来ない中で、この大会に標準を合わせて来てもらったことは、運営者として何よりも励みになります。また来年僕がコースを設定することは無い（？）と思いますが、皆さんも大会に向けて何か目標を持って参加してください。尚一層SKI-0が面白くなると思います。

さて、今回運営をしての感想、反省を書いてみます。

SKI-0の運営をするのはこれが4シーズン目になりますが、今年ほど危機感を持った年はありませんでした。普段でも小人数の運営であるのに、武石さんは直前にイタリアに遠征、柴田さんは就職で仙台を離れ、高島さんはアメリカへ長期出張と言う具合で、僕に負担が大きくなるのは目に見えていました。その僕も休日出勤、自宅待機は当たり前、平日も日付が変わるまで仕事と言う非人道的な待遇のため、事前の準備が思うように進みませんでした。結局現地に下見に行けたのは大会の前週1回だけでした。

参加者の皆さんに中にも、細かいところでの地図の精度に疑問を持たれた方が多いと思います。正直言って、時間が無かったゆえに不本意ながら大会に間に合わせた形になりました。当然の事ながら（？）試走も出来ず、去年のタイムと勘が便りのコース設定となってしまいました。人数的、日程的には今回が極限だと思います。Ski-0 研究会として組織的な運営をすること、研究会の外からも運営に興味、理解のある人を募ることが必要でしょう。

次に残念ながら今回、羽鳥さんがレース中に怪我をされました。牧場の鉄杭は危険だという認識はあったのですが、危険防止策を取らなかったのは失敗だったと思います。そんな中で、レースを中断して事態を報告してくださった永井永寿さんに最大の感謝と敬意を表します。大事に至ることなく、羽鳥さんを病院へ運ぶことが出来ました。ありがとうございました。尚、永井さんはそのあとレースを再開し完走を果たされたことを付け加えておきます。

また、今回はクラス分けに難が合ったと思います。特に35歳未満の人にとっては21AとBしか選択の余地が無く、団体戦も21Aのみを対象としたため、無理に21Aに参加する人が多かったと思います。逆に、丸山茂樹さんや永井直樹さんはBでは物足りなかったのではないでしょうか。今の日本の現状では、年齢でクラスワケ分けするよりも、経験度でクラス分けする方が重要でしょう。それが競技者の底辺拡大につながると思います。

団体戦のルールについては見切り発進的なところがあったので、賛否両論があると思います。少なくとも参加者1人の館林OLCを表彰対象としたのは想定外でした。また、高橋善徳君のOLP兵庫の件についてですが、大会前から OLPの皆さんと一緒に出ようという話があったそうで、当人や OLP の面々には大変気の毒ではあったのですが、事前申込に限るというルールを徹底させてもらいました。最初の1件を許してしまうと収拾がつかなくなる気がしたので、ご了承下さい。チーム戦は盛り上がると思うので、次回も方法を改善して継続したいと思っています。

とりあえず今思いついたことを書いてみました。これを読んでご意見、ご感想のある方、運営に興味をもたれた方は、ぜひご一報下さい。今後のSKI-0発展のために役立たせていきたいと思います。

さて次に、SKI-0人口の増加策についてですが、僕はSKI-0をするグループが増えることに期待しています。OLP 兵庫の内山さんや賀彦さんが大江さんや永井夫妻を誘ったり、荻田さんを中心としてOC下野を立ち上げたりと、その傾向がわずかながら見られて来ています。また、小林さんや元木さんのように家族旅行を兼ねて参加されるのもいいですね。実は僕もそうなのですが、一人で競技を続けるのは苦しいものです。周りに茂樹を与えてくれる人がいるとだいぶ違います。また、移動するにしても何人かで車に同乗できれば格段に楽です。大きい荷物を持って電車で移動することや、一人で雪道を長距離運転するのは危険すら伴います。

競技人口の増加策については真剣に議論する時期だと思っています。SKI-0 研究会の内部だけでは議論に限界があるので、少しでも多くの方からどんな小さいことでもいいので意見を聞きたいです。そして、議論したことを実行に移していきましょう。